
三筋の稲妻

佐乃海テル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三筋の稲妻

【Nコード】

N7180B

【作者名】

佐乃海テル

【あらすじ】

頭が良く、それでいて腹黒い面も持つ成功者の長男・龍男。頭は悪いが、誰よりも正義感に燃える次男・玄平。家の波にもまれて生まれてきた三男・芳郎。巨大企業集団・神成グループ、そしてその根幹・神成会を継ぐ”稲妻”は一体誰か……家柄ゆえの悲劇・波乱万丈物語。

0. 登場人物等

読んでいる最中に分からなくなったらどうぞ。
物語の中で説明するので、最初に読む必要はありません。

・吉野組系図

吉野組

— —

神成会

安曇野会

柳会

神成グループ

・現在の神成グループ全体図

神成系列各社

神成大学

神成学園

—
—
(現在、小等部まで)

—
神成ファンド

—
(安曇野銀行)

・主要登場人物

かみなりげんべい
神成玄平(17)

神成学園高等部2年生の生徒。龍平の次男で、龍男の弟、芳郎の兄。正義感が強く、リーダーシップもある。とはいえ、まだ強引なところも否めない。また龍男ほど頭も良くなく、そういう意味で素直である点が、彼の龍男に対するコンプレックスとなっている。彼なりの成長をし、彼なりの夢はあるが、家柄もあって彼の夢の前には大きな壁ばかりが立ちふさがるのだった。

かみなりたつお
神成龍男(24)

神成商事取締役。龍平の長男で、玄平・芳郎の兄。神成グループ後継者候補ナンバーワン。世渡り上手で頭が良く、それでいて腹黒い面もある非常に複雑な男。玄平との仲は本人はそれほど悪いと思っていないが、玄平は彼のことをあまり好きではない。

かみなりよしろう
神成芳郎(10)

神成学園小等部5年生の生徒。龍平の三男で、龍男・玄平の弟。二人とはいろいろな意味で違った子。穏やかで、争いは好きではない。家の事情は、少し他人と違うことくらいは分かっているが、やはりまだ子供である。

あずみのりようへい
安曇野涼平（16）

神成学園高等部1年生の生徒で、玄平の後輩・幼馴染。小さい頃から玄平を慕っている。安曇野家の長男であり一人っ子のため、将来は安曇野家・安曇野フィナンシャルグループの後継者になる運命の男。

かみなりよしひこ
神成義彦（77）

神成グループ総帥・神成会三代目総長。高度経済成長期から、神成会・吉野組の資金源である神成グループを、現在の形まで作り上げた偉大な会長。今や経済の重鎮であるため、警察や政府も簡単に手出しは出来ない。また、この企業団の建設は吉野会内の役割を分担することにつながったが、これに対する反発もなくはない。

かみなりつるこ
神成鶴子（70）

義彦の妻、龍平の母、龍男・玄平・芳郎の祖母。吉野組全体で、近親者・組内の結婚が慣習化しているなか、義彦がその慣習に逆らって結婚した女性である。義彦の手助けをし、この世界特有の苦労をたくさん味わってきた。現在は自宅で療養中。玄平をよく可愛が

っている。

かみなりりゅうへい
神成龍平（47）

義彦の長男で、龍男・玄平・芳郎の父。義彦の息子ではあるが割と無欲で、義彦ほどの手腕もなく、その手腕は三人の息子が受け継いだといえる。義彦との話し合いで、神成グループ・神成会の次期経営者は自分ではなく、三人の息子からとしている。

かなやましんのすけ
金山新之助（57）

神成グループの3本指に入る、重要人物。神成商事専務取締役、神成化学工業代表取締役、神成学園学園長を務める敏腕。

1. 立候補（前書き）

佐乃海テルの新連載です。
先行きぼんやりのくせに、設定だけは大掛かりです。

1. 立候補

「あと……5秒かつ！」

校舎中に、始業のベルが鳴り響く。そのベルの一音一音を追いかけるように、一人の少年が教室めがけて走っている。

そして目的の教室の、後ろの戸を開けて、少年は叫んだ。

「ぎ、ギリギリセーフかつ？」

すると少年の見る先には、呆れた顔をして教壇に立つ教師。

「残念だったな。遅刻届もらってこい」

教室中から笑いが起こった。

「はい、今学期3回目。まだ3学期始まってそんなに経っていない
というのに……神成^{かみなり}、お前夜更かしとかしてるんじゃないだろうな」
少年は職員室で遅刻届の紙をもらってくる際に、生活指導の西村^{にしむら}
に問い詰められた。

「してません。気づいたら慌てるような時間で……」

「まあ最終的には自分で直さなきゃならんしな。それにしても、お
前学級委員なんだろう？」

西村はにやけている。それを見ていると少年も照れくさくなっ
てくる。

「えー、まあ」

「だったら、もっとしつかりしなきゃいかんだろ。な？」

「はい、以後気をつけます……失礼しました」

「おう、今日一日頑張れよ」

私立神成学園高等部。少年の通っている学校である。

神成学園は今や、小学校から高校までエスカレータで上がれる私

立学校として有名である。ただし、大学の併設校という位置づけではないため、神成大学に進学するためには、別途入学試験を受けなければならない。

この神成学園の経営をしているのが、巨大企業集団・神成グループである。

神成学園は小等部から高等部まで一つの土地に立てられている。そのため、いろいろな校舎を行き来する必要があるため、どこへ行くのも時間がかかる。

そして今、職員室から帰っている少年がこの学校で今注目を浴びている、神成^{かみなりげんべい}玄平である。この冬を越し、春になると高等部の二年生になる。彼の苗字がこの学園の名と同じなのは、決して偶然ではない。神成グループ総帥である神成^{かみなりよしひこ}義彦の孫なのだ。

玄平が教室へと近づいたところで、教室でのホームルームを終えて職員室に向かっている担任とすれ違った。

「あ、神成。今日の連絡事項2つな。一つはこの間の集金が明日までってやつ。でもう一つは……生徒会長選挙の立候補が今週中ってこと」

「生徒会長選つか！」

玄平は目を輝かせ、叫んだ。

「ん」

担任はその玄平の反応に、少し驚かされたようだった。

「まあ、そんなに興味があるなら立候補してみるがいい。当選するかどうかはお前の人柄と政策にかかっているがな。昼休みに生徒会事務室に書類もらいに行くんだぞ」

「はい！」

その輝きに満ちた笑顔の理由がいまひとつ分からない担任は、苦

笑いをし首をかしげつつ、職員室のほうへと去っていった。

玄平が教室へ戻ると、クラスメイトの男子が声をかけてきた。

「玄平！ 生徒会長選挙だってよ！ 学級委員しているお前には朗報じゃねえか！」

「分かってるって！ とりあえずいろいろ考えなくちゃな！」

玄平は午前中、生徒会長選挙のことが頭を離れなかった。

生徒会長は、玄平がずっと前から憧れているものだった。それには理由が二つある。

一つは神成学園の生徒会がとても変わった組織であること。小等部・中等部・高等部とある神成学園では、生徒会がその三つの中で一つになっているのだ。すなわち、神成学園の生徒会長は高等部の生徒会長ではなく、神成学園全体の生徒会長なのだ。

神成学園の歴史は古くも新しくもない。高等部から順に拡大していったため、卒業生によってどこから入学したかは違う。玄平の父である龍平も一応学園の卒業生だが、入ったのは高等部だ。

生徒会自体は昔からあった。そして他の学校同様に、生徒の自治的な学校運営のための組織として成立していた。それが変わってしまったのは、玄平の兄・龍男たつおが7年前、生徒会長に就任した時だった。

神成学園の運営元の、しかも一番孫が生徒会長になったのである。その1年間の生徒会は確実な変化を遂げた。

まず授業が教科の講義となっていない教師に対する、免職要求デ

モ・職員室への抗議。生徒たちが夜まで体育館で”決起”し、その教師の免職が決定すると、校庭を龍男が乗った装甲車が凱旋するといった”イベント”が横行した。

ただこの生徒会が1年間最後まで務められたのは、もう一つの側面での変化があった。それは近所での一大事に生徒会で出動するというプロジェクトを旗揚げ、そしてそれを見事に実行・成功させてしまったのだ。

これらの行動を、もちろん神成グループも見えていなかったわけではない。だがそれは彼の将来を見据えた上で好ましくないわけでもない行動であり、彼自身それを見越してやっていた。こうして龍男の評価は、実は内外ともに上がっていたのだ。

だが、そんなこともつゆ知らず、玄平はただ龍男の時代のただものでない生徒会を復活させてみたい一心で、そして自分がただものでない人間になりたくて、生徒会長選挙に立候補したかったのだ。ただの経営者の孫で終わりたくない。そのためにも、彼は小学生の後半あたりからほとんど学級委員を務め続けていたのだ。ただのプロセスであった学級委員に対しても愛着が湧くようになり、そしてそれはその先にある生徒会長という職への愛着と等しかった。

昼休み、玄平は生徒会事務室に立候補書類をもらいに行った。5限の授業が始まる前に書き上げてしまった。

だが彼にはまだ今日やり残していることがあった。

プルル……

電話の発信音が鳴る。なかなか出ない相手に玄平はかけ直しを考えて始めていた。なんだったら、今度にでも伝えればいいのだが……

…。

「はい」

相手は、出た。

「龍男兄さん、俺、生徒会長選に出ることにしたから！」

「そうか」

龍男の返事は、応援でも説得でもなかった。

「う、うん……」

玄平も反応しづらい。そして、急いでいるのか龍男の方から沈黙を切った。

「ま、敵は多いだろうから頑張れ」
電話は切れた。

1. 立候補（後書き）

おそらく分かりにくい第1話だったと思います。

これは、設定をなるべく小出しにしようという工夫のため、少し不自然に見えてしまっています。申し訳ありません。

これからこの小説を暖かく見守っていただければ、幸いです。

2. 神成家（前書き）

怪我などをしていたため、久しぶりの更新になります。
これをもって、執筆活動の再開に出来たらいいなと思います。

2. 神成家

「おい！ 今晚、もうじき龍男さまがお帰りになるそうだ！ 今すぐ玄関に並べ！」

玄平の家を、一人の使用人――厳密には違うが――の男が叫びながら走り抜ける。

その知らせを聞いた使用人たちもバタバタし始める。

自室にいた玄平は、それらを騒がしいと思いつつも納得した。確かに兄・龍男が自宅に帰ってくるのも、かれこれ3ヶ月ぶりほど。家柄が家柄だけに、3ヶ月出迎えをしていないことも相俟って、使用人たちが騒ぐのも無理はない。

部屋を出て、玄平が玄関前の様子をうかがうと、既にそこには使用人たちが左右に並んでいた。そして玄関に近い方にいる数人の使用人は、心なしか手を震わせている。それは新入りの使用人だった。龍男が3ヶ月も家に帰らないでいた間に、また新入りも入っているのだ。

やがて黒いリムジンが門を通過して近づいてくる。それまで少し緊張していた玄関前の空気が、さらに研ぎ澄まされる。止まったリムジンの中から男が降りると、空気の緊張はピークに達した。

「龍男さま、お帰りなさいませ」

「お帰りなさいませ！」

家で一番の使用人の挨拶に合わせ、皆声を揃えて龍男を出迎える。玄平にとっては見慣れた風景だが、それにしても凄みを感じずにはいられない。どういうわけか、龍男は胸に花を抱えている。

「みんな、長く顔を見せなくてすまなかったな」

「家のことは心配いりません。ですが、龍男さまのお帰りを皆待ち侘びておりました」

「そうか……すまなかったな」

そして使用人の列を龍男は進んでいく。その間も一人ひとりの使用人と目を合わせ、軽い挨拶をする。これも龍男の人柄だ。

やがて列の末端、新入りのところまで来る。新入りが口を開ける前に龍男が先に手を差し出す。

「新入りだな。どうか、よろしく」

新入りは呆然として、ただただ嬉しそうな顔を浮かべながら、龍男の手を握る。

そうして新入りとの挨拶も終えた龍男は、玄関に入って玄平と顔を合わせた。

「兄さん、お帰り」

「うん。玄平、花だ」

胸に抱えていたその花は、玄平に贈るためのものだった。

「え？　なぜ？」

「生徒会長選挙に立候補するんだろう？　それだけでも立派な仕事だ。頑張れよ」

「ありがとう」

差し出された花を玄平は受け取る。龍男は玄関に座り込み、靴を脱ぎ始めた。

「あ、お祖父ちゃん」

奥を見やった玄平が見たのは、出迎えに来た祖父・義彦だった。

「龍男、またしばらく顔を合わせなかったな」

龍男は靴を脱ぎ終わり、立ち上がりながら言った。

「まあ家限定だとそうなりますね。なんだかんだ言って仕事では顔合わせているでしょう」

「はっは、そうだな。それにしてもなぜ突然こうやって？」

「お祖父さんに用があつて来たんですよ。まあ、それは晩御飯の後
にでもしましょう」

そう龍男がリビングに向かうのを急かすように言うと、義彦もそ
れにならった。

「よし、まずは飯だな」

玄平もそれについていく。

祖母・鶴子も療養中の身ながら、せっかくだからと出てきて、食
卓は盛り上がった。

「龍男もまた大きくなったねえ……」

「そんな、身長ではもう伸びていませんよ。日々まだまだ社会勉強
です」

龍男を囲んでの夕飯は、玄平にとっても楽しいものとなった。

夕飯が終わった後、龍男は玄平と高校生活の話をしていた。勉強
のこと、そして生徒会のこと・・・普段忙しくて聞けない話を、尊
敬する兄からこれでもかというほど、玄平はたくさん尋ねた。

「……さて、もう11時だ。もう寝なさい」

龍男は玄平に、もう寝るように促した。

「え？ まだ11時だよ？ 高校生なんだから少しくらい……」

「生徒会長に、なるんだろ」

龍男は少し笑いながら言った。

「学園の模範になるんだから、遅刻とか居眠りは許されないぞ。そ
れに今から支援者を募ればいいだろう」

「なるほど……じゃあ寝る！ おやすみ！」

火でも付いたかのように、玄平は自室へと引き上げていった。

それと入れ替わるように、自室にいた義彦がリビングに戻ってき
た。

「玄平は寝たか。話は何だ」

「止めなかったんですね」

龍男の顔から笑みが消えた。

「何を？」

義彦はまだ状況がつかめていない。

「生徒会長なんて、完全に私の座を狙っているのでしょうか思えません」

「それは、考えすぎだろう」

義彦はなだめるように言った。

「玄平はただ単に、お前に憧れていたただけだよ。だから自分も生徒会長になってみたいと思っていた。それで出馬したただけだろう」

「野心というものは、本人の知らない所で育つものなんですよ」

龍男は自分の部屋に向かおうとした。

「待て。お前まさか、金山に……」

「おやすみ」

龍男は聞く耳を持たずに、リビングを去った。

神成家は元々、日本全体を牛耳っていた暴力団・吉野組の下部組織だった。

そのうち神成会を結成し、吉野組の中でも繁栄していた。ところが、戦後の警察による暴力団の取り締まりにより、吉野組の下部組織は次々と衰退していった。

その中でも、生き残り続けている数少ない一つがこの神成会だった。神成会3代目の神成義彦は、神成商事を設立。日本社会の中核となることで、裏の顔を存続させたのである。その偉大な3代目の孫にあたるのが、龍男とその弟・玄平と芳郎である。

孫がいるのだから、もちろん息子もいる。龍男たちの父親である龍平だ。ただ龍平は、鶴子に似て小さい頃から病弱で、自分が神成家を継ぐのは荷の重すぎる仕事だと、若い頃から辞退していた。そ

れがゆえ、息子たちの誕生やそれから、運命の後継者候補がゆえの20年間だったのだ。

もちろん、よほどのことがない限り、長男である龍男が次期後継者である。ところが、神成家の運命の歯車はそう簡単には回らなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7180b/>

三筋の稲妻

2010年10月12日04時17分発行